

近代文学研究叢書
第四十八卷

昭和 54 年 1 月 15 日 印刷
昭和 54 年 1 月 30 日 発行

[¥4600]

著者

昭和女子大学近代文学研究室

発行者

東京都世田谷区太子堂二丁目七番地
坂本由五郎

印刷者

東京都千代田区神田錦町三丁目十四番地
梶原忠幸

発行所

東京都世田谷区太子堂二丁目七番地
昭和女子大学近代文化研究所
振替口替 東京四一七〇八六七
電話(世)五一三一 内線三〇七

近代文学研究叢書

第四十八卷

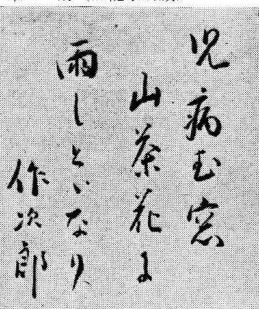
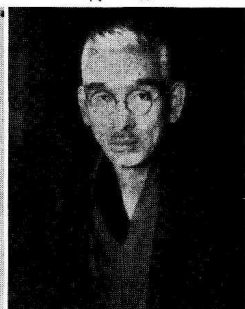
昭和女子大学

近代文学研究室

加能作次郎 (1)

筆 跡 (加能家所蔵)

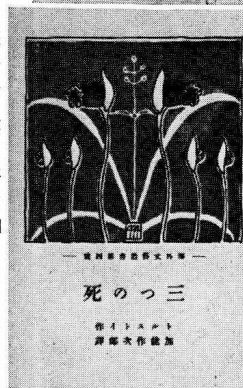
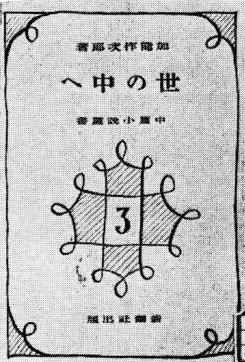
肖像



傷ける群

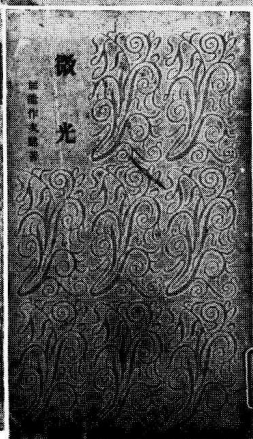
大正10年12月刊
(昭和女子大学蔵)

世の中へ 大正11年5月刊
(昭和女子大学蔵)



霰の音 大正8年11月刊
三つの死 大正2年9月刊
(昭和女子大学蔵)

小夜子 大正10年7月刊
(昭和女子大学蔵)



微光 大正11年6月刊
(昭和女子大学蔵)

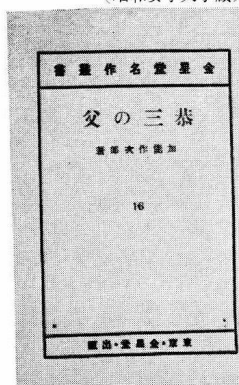


アウグスト・ストリンドベルヒ

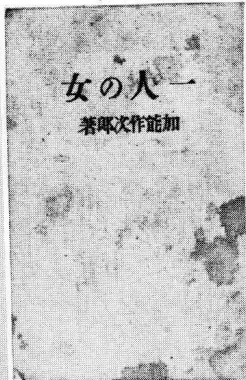
大正3年7月 (昭和女子大学蔵)

加能作次郎 (2)

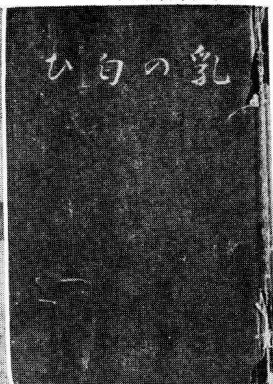
恭三の父 大正15年9月刊
(昭和女子大学蔵)



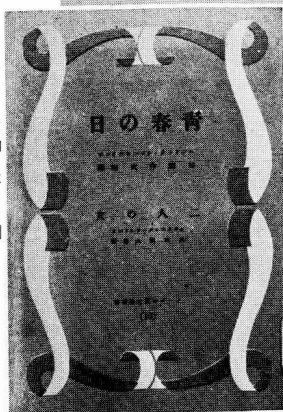
一人の女 大正12年12月刊
(昭和女子大学蔵)



乳の匂ひ 昭和16年8月刊
(昭和女子大学蔵)



若き日 昭和2年3月刊
青春の日 昭和16年5月刊
(昭和女子大学蔵)



加能作次郎著

若き日



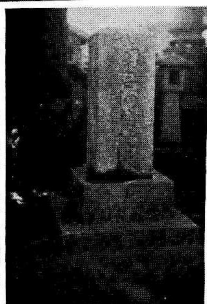
1907

廣治堂書局

このわた集 昭和16年11月刊
(昭和女子大学蔵)



墓—石川県羽咋郡富来町風無所在



文学碑—石川県羽咋郡風無所在

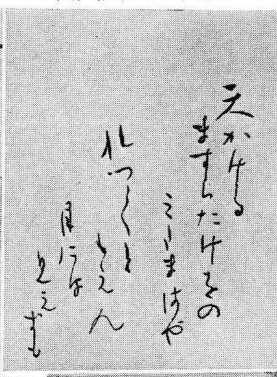
長谷川時雨 (1)

女人芸術 創刊号

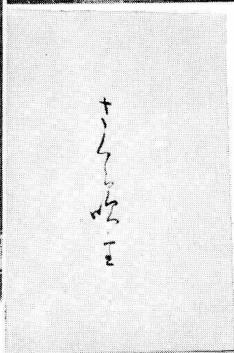
昭和3年7月

(昭和女子大学蔵)

筆跡(長谷川仁氏所蔵)

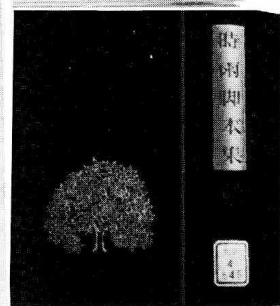
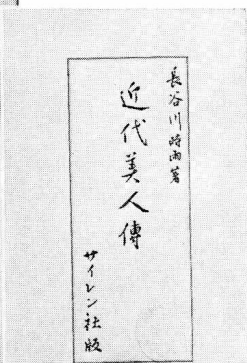


晩年の肖像(長谷川仁氏所蔵)



さくら吹雪 大正6年4月刊
女人芸術 第二卷三号 昭和4年3月
女人芸術 第二卷十号 昭和4年9月
(付録女人大衆)

(昭和女子大学蔵)



舊聞日本橋

昭和10年2月刊
(昭和女子大学蔵)

近代美人傳 昭和11年2月刊
(昭和女子大学蔵)

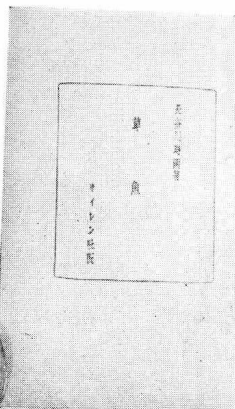
時雨脚本集 昭和4年9月刊
(昭和女子大学蔵)

長谷川時雨 (2)

桃 (梅原龍三郎装画)

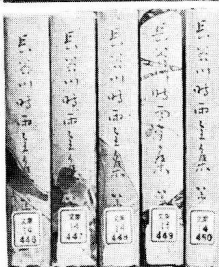
昭和14年2月刊
(昭和女子大学蔵)

近世美人傳 昭和23年11月刊
(昭和女子大学蔵)



草魚 昭和10年7月刊 (昭和女子大学蔵)

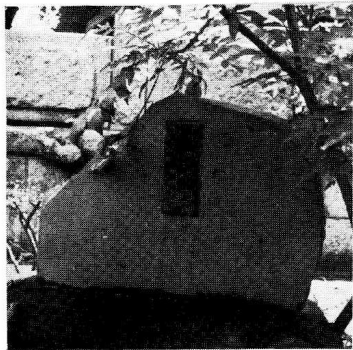
春帯記 昭和22年10月刊 (昭和女子大学蔵)



長谷川時雨全集全五卷
昭和16年12月、17年7月刊と
三巻表紙 (上村松岡装画) (昭和女子大学蔵)



墓—川崎市鶴見区総持寺内



句碑—川崎市鶴見区総持寺墓所内

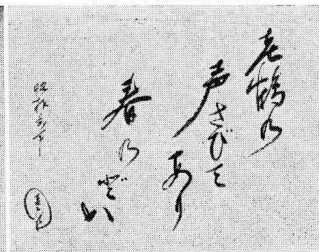
中村吉藏 (1)

よしあし草 創刊号

明治30年7月
(昭和女子大学蔵)

筆跡 (中村雄蔵氏所蔵)

肖像 (昭和女子大学蔵)

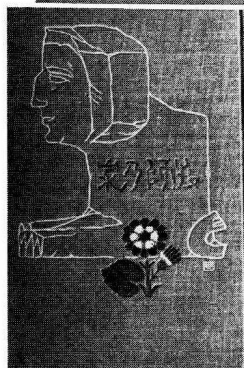


無花果 (大阪毎日新聞) 明治34年
3月28日 (中村雄蔵氏所蔵)
無花果 明治35年3月刊
(昭和女子大学蔵)

角笛 明治36年11月刊 (昭和女子大学蔵)

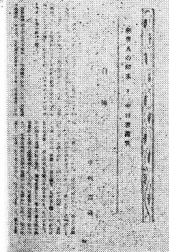


小羊 明治34年5月刊
うひ子 (文芸倶楽部) 明治33年4月
演劇研究 創刊号 大正14年4月
(昭和女子大学蔵)



牧師の家 明治43年5月刊
(昭和女子大学蔵)

牧師の家 (東京朝日新聞) 明治43年2月
5日 (藤木宏幸氏所蔵)



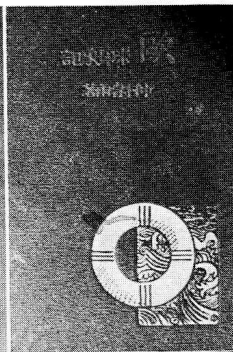
目傳—演劇新潮
大正14年2月
(昭和女子大学蔵)

中村吉藏 (2)

希臘悲劇 六曲 大正11年8月刊
(藤木宏幸氏所藏)

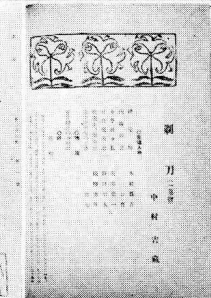
歐米印象記 明治44年6月刊
(昭和女子大学蔵)

イブセン 大正3年11月刊 (藤木宏幸氏所蔵)



最近欧米劇壇 明治44年6月刊
(藤木宏幸氏所蔵)

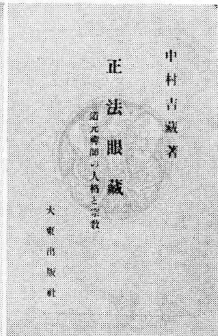
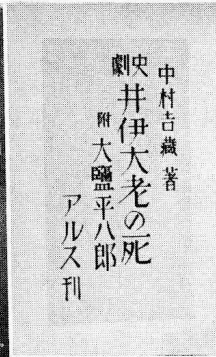
演劇 創刊号 昭和7年4月
星亨 (改造) 昭和2年7月
(中村雄蔵氏所蔵)
(昭和女子大学蔵)



刺刀 (中央公論) 大正3年7月
飯 (太陽) 大正4年1月
(昭和女子大学蔵)



墓一津和野永明寺内

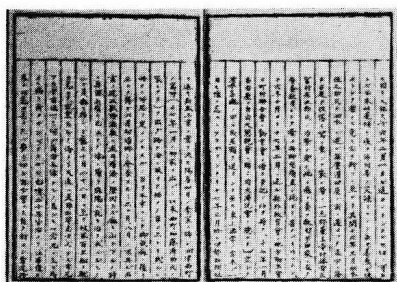


正法眼蔵 昭和10年12月刊
(藤木宏幸氏所蔵)

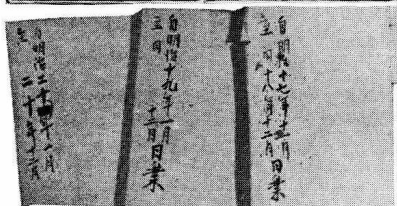
現代演劇論 史劇井伊大老の死
昭和17年11月刊 (昭和女子大学蔵)
大正15年3月刊 (藤木宏幸氏所蔵)

増田 藤之助 (1)

肖像 (増田セツ氏所蔵)



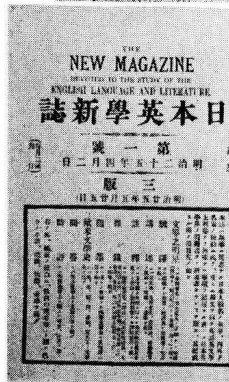
筆跡一日記 (増田セツ氏所蔵)



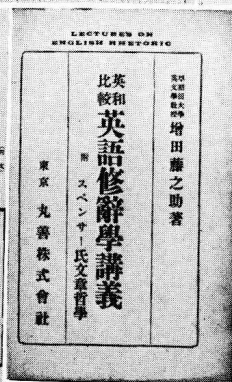
中外電報 明治23年3月20日号 (増田セツ氏所蔵)



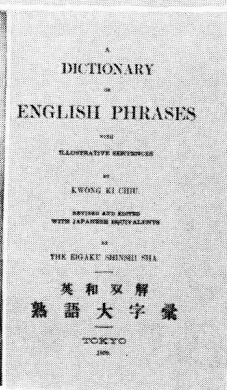
伊勢新聞 明治16年12月12日号 (増田セツ氏所蔵)



日本英學新誌
明治25年4月創刊
(昭和女子大学蔵)



英和比較英語修辭學講義
大正2年10月刊
(増田セツ氏所蔵)

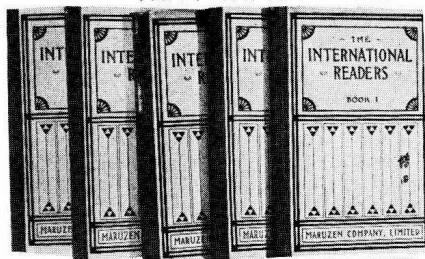


英和双解熟語大字典
明治32年11月刊
(増田セツ氏所蔵)

増田 藤之助 (2)

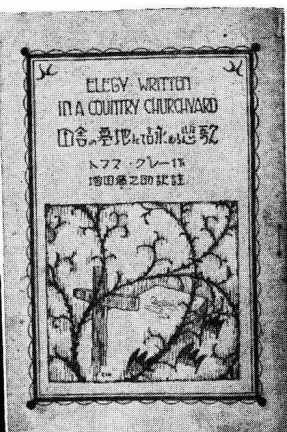
The International Readers, Book I~Book V

大正 4 年10月刊 (増田セツ氏所蔵)

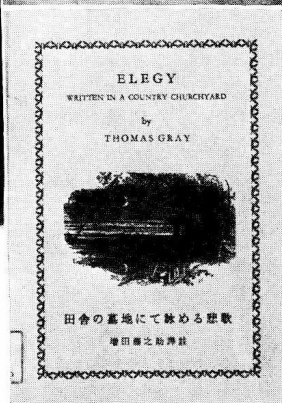
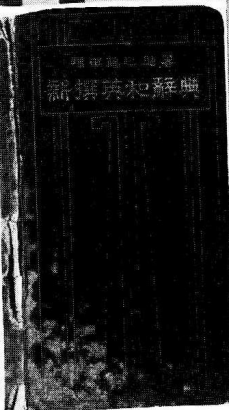
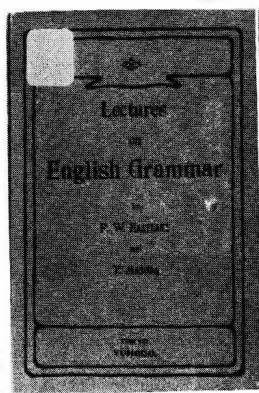


Elegy written in a country churchyard

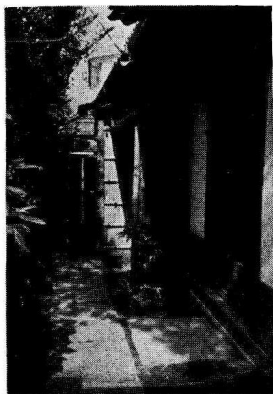
私家版昭和 2 年刊 (増田セツ氏所蔵)



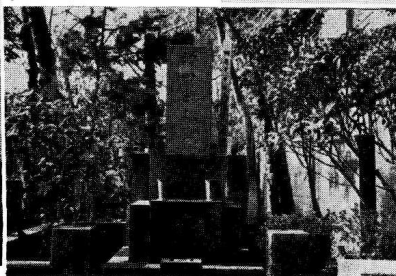
新撰英和辞典 大正 2 年10月刊 (増田セツ氏所蔵)
英和比較英文法十講 明治 43 年10月刊
(昭和女子大学蔵)



田舎の墓地にて詠める悲歌
昭和 36 年 5 月刊 (昭和女子大学蔵)



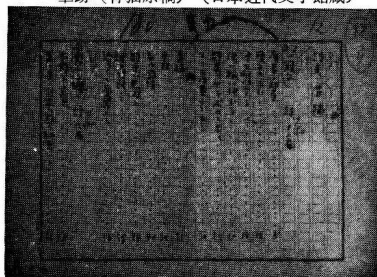
旧居—新宿区中井



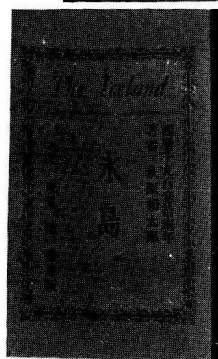
墓一本郷浄心寺

萩原朔太郎 (1)

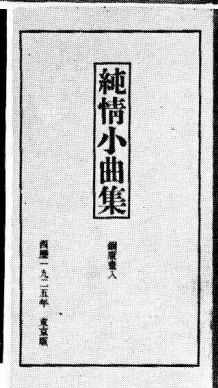
筆跡(青猫原稿) (日本近代文学館蔵)



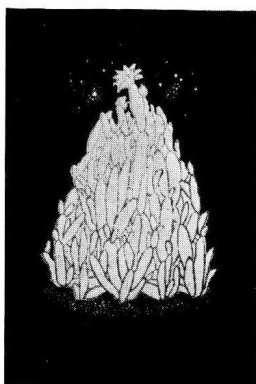
肖像



水島
昭和9年6月刊
(日本近代文学館蔵)



無からの抗争
昭和12年9月刊
(日本近代文学館蔵)
純情小曲集
大正14年8月刊
(昭和女子大学蔵)



虚妄の正義
昭和4年10月刊
(日本近代文学館蔵)



絶望の逃走
昭和10年10月刊
(日本近代文学館蔵)

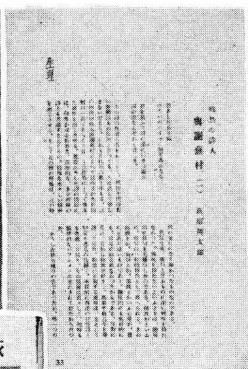
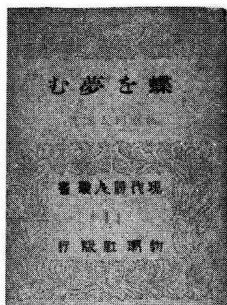
萩原朔太郎 (2)

郷愁の詩人與謝蕪村
「生理」創刊号 昭和8年6月
(日本近代文学館蔵)

定本青猫 昭和11年3月刊
(昭和女子大学蔵)

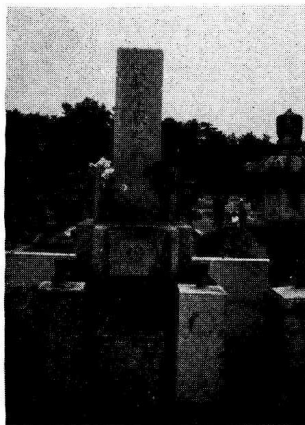
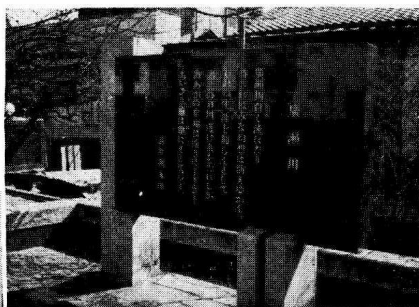
蝶を夢む

大正12年7月刊
(昭和女子大学蔵)



廊下と室房

昭和11年5月刊
(日本近代文学館蔵)



墓一前橋市政淳寺

前橋市広瀬川の詩碑と桃井小学校地内の書斎

目次

口 絵

第四十八卷の成立	近代文学研究室……(一四)
凡 例	近代文学研究叢書編集室……(二〇)
加能作次郎	近代文学研究室……(三)
長谷川時雨	近代文学研究室……(九)
中村吉藏	近代文学研究室……(一九)
増田藤之助	近代文学研究室……(二六)
萩原朔太郎	近代文学研究室……(三三)
近代文芸年表(48)	近代文学研究室……(四九)
PERSONALITY PROFILES	近代文学研究室……(五二)
卷末付記	近代文学研究叢書編集室……(五六)
読 後 感	諸 家……(五七)
第四十七卷年表補遺	近代文学研究室……(五七)
索 引	近代文学研究叢書編集室……(五九)

第四十八卷の成立

本巻は昭和期第二十三巻として、昭和十六年八月から昭和十七年五月までに歿した左記五名の研究調査を取めた。

加能作次郎は小説家。明治十八年（一八八五）一月十日、石川県羽咋郡西海村（現富来町）字風戸で、漁師の父浅次郎、母はいの次男として生まれた。父は京都の仏壇屋入江家の末子であるが、母方の実家加能家の養子となり、後、分家独立して漁業を営んだ。母はいは作次郎が生後十カ月で他界、父は浅野ゆうと再婚した。明治二十四年、西海尋常小学校に入学した。成績は良かったが栄養不良のため常に虚弱だった。卒業後は高等科へ進むことを希望したが、継母への気兼ねもあって容易に許されなかった。校長や村長の口添えで進学がかなえられ、富来高等小学校へは村費で通学、成績は群を抜いた。しかし病気のため四年級限りで学校を退学。その後、京都の伯父のもとで、家業を手伝いながら苦学し、若くして人生の辛酸をなめつくした。その間も向学の心やみがたく、遂に念願の早稲田大学文学部英文科に入学、明治四十四年、二十七歳で卒業。卒業に先立ち四十二年七月、雑誌「ホトトギス」に処女小説「恭三の父」を発表して文壇に登場、以来、一貫した自然主義作家として地味な創作活動を続けたが、自伝小説『世の中へ』（大・二）一篇によって文壇に確たる地歩を占めた。また、大正二年から十年まで博文館に籍をおき、「文章世界」の編集に専念、その間、文芸時評の筆も

とり批評活動もさかんに行った。作品は主として郷里能登を背景に、自然主義作家として自伝的作風を貫いた。主著は『恭三の父』、『世の中へ』、『傷ける群』、『乱の匂ひ』等。また小品随筆集『このわた集』は死後編まれた。昭和十六年八月五日、クルップ性肺炎のため死去、享年五十六であった。

長谷川時雨は劇作家、小説家。本名康子。明治十二年（一八七五）十月一日、東京日本橋通油町に呉服問屋の父深造、母多喜の長女として生まれた。生来腺病質の時雨は少女時代から文学に親しみ、読書は草双紙から翻訳小説に及んだ。母の意向で行儀見習として岡山藩主池田侯爵の邸に奉公、その頃佐佐木信綱主宰の竹柏園に入門した。明治三十年十二月、鉄成金水橋家に嫁入ったが家風に馴染めぬまま小説を書くことを考える日々が多かった。明治三十四年「女学世界」に投書した小品「うづみ火」が特賞となったのが契機で同誌に投稿を続けた。その後肺結核を病み離婚する。明治三十八年「読売新聞」の懸賞脚本に応募した「海潮音」が特選となる。この時の選者坪内逍遙に師事し、劇作家として出発、「心の花」、「早稲田文学」などに歌劇や脚本を書く一方、藤間流の舞踊に専念して新舞踊劇を試みたりもした。明治四十一年、帝国義勇鑑隊「桜丸」の基金募集に脚本を応募して当選した「霸王丸」は「演芸画報」に発表され、歌舞伎座でも上演された。女流作者の手になる歌舞伎座公演はこれが初めてであった。次いで「海潮音」も新派俳優により「新富座」で上演。また『日本美人傳』（明43・11）を手始めに古今女性の美人伝執筆。大正三年、菊五郎を中心とした劇団「狂言座」を結成し逍遙や鷗外の脚本を公演、しかし時雨の理想的演劇観は複雑な劇界では生かし得ず、孤立化の道をたどるようになる。大正十二年、岡田八千代と「女人芸術」を創刊、二号で廃刊したが昭和三年良人三上於菟吉の